

廃人の世界救済録(仮)

アブノーム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は死んだ

何度も死んで、死んで、死んで

死ななくなった頃には私に敵う者は居なくなっていた

全てを極め、全てを集め

世界に飽きた私は埋まることを選んだ

それなのに、私の目の前に現れたのはエヘカトル様でもジュア様でもルルウィ様でもない女神

これまで培った力を駆使して世界を救ってください？

ふざけるな、私は死んだんだ、もう埋まったんだ
私の叫びも虚しく視界は白く染まり………

目次

私は埋まりたかった	1
目覚めたのは酒場	6
目指すはレーベ	10
レーベ到着	14
いざないの洞窟を抜けて	19

私は埋まりたかった

私はライア、久遠の使者の異名で知られるイエルスの遺跡荒らしだ

いや、種族も職業も既に関係ないだろう

主だった能力も、技術も、魔法も、このイルヴァにおいて限界とされるまでに鍛え抜いた

なんとなく気が向いて多数のペットを育成したり、分裂生物（バブル）の皮を狂ったように集めてハンマーを鍛えたり、恐らく私はこのイルヴァの全てを極めたと言っているだろうか

私がイルヴァの、この地ノーステイリスに降り立ってもう三千年は経ったのだろうか
私は、この生に飽きを感じていた

もはや変わり映えのしない生活

すくつは何万層も潜り、既に変化を感じない

生に意味を見いだせない私は、死んで、埋まる事を決意した

早速ダメージを完全に無効にする矢束を外し、頑丈なロープを使う

これを使うのも二度目か、確か最初はあの緑髪のエレアを爆殺するための猫の揺りか

ごを運ぶのに使ったんだっただ

もう、遠い過去の記憶だ

私は首を吊り、9999のダメージを受け……………死なない

困った、私のHPは素の状態で2000万あるんだっただ

これでは2000回首を吊っても、ヘタをしたら自然治癒が勝りかねない

仕方ないか、私は自宅に設置してあるシエルターの一つに入る

二千八百年程前に設置した、所謂餓鬼浴用のシエルター

中には8体の餓鬼が居て、私が中に入れば飢餓の手で空腹状態にしてくれる

昔はこれを利用して食事による成長を狙ったものだ

シエルターの階段を降り、八方を餓鬼に囲まれる

この餓鬼達は、私がすくつで捕まえてきた選りすぐりの者達だ

当然全ての主能力は限界値であり、私が中に入れば高速で腹を減らしてくれる

私は一斉に飢餓の手を受け、瞬く間に腹を減らし

間もなく餓死する事に成功した

ああ、これで私は終わることが出来るんだ

そう、思っていた時期が私にもありました

埋まったはずの私の目の前に現れたのは、恐らく女神

もつとも、私の信仰するジュア様や、エハカトル様、ルルウィ様とも違う名も知らない女神ではあるが

「貴女は、遠き地イルヴァにて死にました」

「知っていますか」

「そうですか……私は死の瞬間を見ることが出来るわけでは無いのですが、貴女程の強者が死んだのです、さぞ凄惨な死だった事でしょう」

「いえ、餓死ですが」

もつと言えはほぼ自殺ですが

「……………そ、それは良いのです

実は、私は女神として貴女にお願いがあり、ここに呼び寄せました」
はあ

「実は、とある世界が滅びようとしています

その世界では勇者が生まれ、その滅びの原因を討つ……そういうシナリオになっているのですが、どうやら戦力が足りず、このままでは勇者が敗れてしまうでしょう」

はあ

「そこで、貴女には勇者の仲間として旅に同行し、共に滅びの原因を……魔王を討ってほしいのです」

「嫌です、素直に埋まらせてくださいよ」

「そこで、貴女には勇者の仲間として旅に同行し、共に滅びの原因を……魔王を討ってほしいのです」

「嫌です」

「そこで、貴女には勇者の仲間として旅に同行し、共に滅びの原因を……魔王を討ってほしいのです」

「嫌です」

「そこで、貴女には勇者の仲間として旅に同行し、共に滅びの原因を……魔王を討ってほしいのです」

「これ了承しないと終わらないパターンですか」

「わかりましたよ行けば良いんでしょう行けば」

「最悪その世界で死ねば、もう一度埋れるでしょ」

「ありがとうございます、それでは貴女にこの度の転生の特典を与えましょう」

「いえ、別に要りませんが」

「というわけで、生前の力をそのままに、貴女の愛用していた武器の力を貴女にそのまま」

宿す事としましょう」

「いえ、流石にそれは困るんですが

ダメージ完全無効とか過剰な魔法威力強化とか盛ってるんですが」

「更に、貴女の居た世界の魔法のストックは睡眠を取る事で回復する仕様としましょう」
「それはちよつと助かりますけど、せめて完全無効と威力強化はどうにかありませんか」
「それでは貴女の活躍を天より見守っていますね」

「ちよつと話聞いて聞けよおい女神コラ聞けって言ってるんだろ!？」

視界が真っ白に染まった

はっはっは……ふざけんな！

目覚めたのは酒場

真っ白な視界が落ち着き、私は目を覚ました

酒の臭い、鳴り止まない喧騒

どうやらここは酒場のようだ

なぜ最初から酒場で酒を飲んでいるのかは分からないが、あの女神の思惑だろう
酒場を出たところで何かできるわけでも無い

ジャーナルを確認すると、私はここで勇者とやらを待っていれば良いらしい
仕方なく手元にあつたビアをちびちびと飲み待つことにした

目を覚ましてから10分程だろうか、酒場の扉が開いた
入ってきたのは全体的に青っぽい少年だ

年の頃は16前後と言ったところか

年齢と外見が私のように一致しないのなら別だが、この世界の常識も学んでいかなければならないだろう

「僕は勇者オルテガの息子アレル！」

魔王バラモス討伐のために仲間を集めに来た！

誰か、僕と共に来る者は居ないか！」

少年の声に、一瞬酒場が静まり……………笑い声にあふれた

「ハツハツハ！あいつバラモスを倒しに行くんだってよ！」

「あのオルテガの息子だっただから期待してたが、とんだチンチクリンじゃねえか！」
「オルテガに倒せなかつたんだ、お前みたいなガキが倒せるかよ！」

「……………っ！」

アレルと言う少年は、その声に悔しそうに顔を歪ませる

まあ少なくとも今は力が足りてないだろうから、この先の成長に期待と言ったところか

ま、私が死ぬためにも着いていってやるとしよう

「それじゃ、私が共に行こうか」

「！」

「そう驚いた顔をするな、ああやって笑ってるのは自分に自信を持ってなくて、魔王討伐とやらも諦め切った敗者だ、あんな奴らの言うことも気にする必用は無い」

「んだとこのアマー！」

最初にアレル少年を笑った男が私に食ってかかり、拳を振りかぶる

困ったな、敵対されると復活の魔法じゃ蘇生出来ないんだが

しかたない、あれで行くか

「舐めた口利いてんじゃねえぞ！」

拳を振り下ろしてくるが………遅いな、速度80と言ったところか、なんのバフも掛けていない私でも25回は動けるぞ

私は窃盗技能で少年の背中の剣を掠め取り……ろくに刃は無いが両刃か、仕方ない
剣の腹の部分で男を吹っ飛ばす

「安心めされよ、峰打ちにごさる……なんて」

うん、死んでないな

魔法威力の盛られた私の癒しの手じゃ回復オーバーフローを起こして大変な事になるし、放置で良いか

少年から掠め取ったブロンズの長剣を返す

「じゃ、行こうか少年　ここに居てもロクな仲間が集まりそうにないしね」

「え、あ、いつの間に!?!　じゃなくて、わかりました!」

少年を連れ立って酒場をあとに………と、そう言えばビアの代金を払ってなかったな
まあこの世界のお金は多分無いだろうし、現物で………ああ、こないだ給料箱に入ってた金塊が四次元ポケットに入ったままだったかな

「これは酒代、お釣りはとつといて」

「え、ええ……こんな人店に来てたかしら……」

何か言っていたが気にしても無駄だろう、改めて少年を連れ立って酒場をあとにした
さて、勇者と思われる少年と会えたんだ、ジャーナルが更新されているはずだが

……

なるほど、次はナジミの塔とやらを登ればいいのか

目指すはレーベ

酒場を出た私と少年は、武器屋で軽く装備を整える

と言つても、私の峰打ち用の銅の剣と少年の防具だけが

そして街を出ると、スライムやおおがらすと言う名前の魔物が数体出てきたため少年を前に出して私は数歩下がる

「つて、ライアさんは何もしないんですか!？」

「私が出たらすぐに終わるじゃないか、私に向かつてきたのは相手してあげるからキリキリ戦いな」

「え、ええ……………」

まあ、私の隠密スキルがあれば、プチや鶏相当の魔物達に気づかれるとも思わないが案の定魔物達は全て少年に向かう

少年は傷つきながらも一体一体着実に倒していつてるが、あのままだと死にそうだなかと言つてジュアの癒しは勿論、癒しの手や治癒の雨でもオーバーフローしてしまうし

ああそうだ、アレで良いか

「Sle^鈍os Laz^足im, Misty^脆 Ru^のst^霧」

私の魔力が詠唱によって形となり、魔物たちを包む

「これは魔法……ボミオスとルカナン……？」

「ほらほら驚いて手が止まってるぞ」

「は、はい！」

一度手を止めるも、再び手を動かして魔物を片付けていく少年

数分の内に魔物……途中から乱入してきたものも含めてスライム13体におおがらす8体の殲滅を終えた

うん、センスは上々かな、勇者の息子を名乗るだけの事はあるかも

「ライアさん、さっきの魔法は一体……」

「うん？ボミオスとルカナンだっけ、そんな感じの魔法だよ」

ほら、そんな事よりも一応私は君の仲間になったんだ、つまりPTRリーダーは君なんだから次の目的でも教えてくれないと困るな」

「その内教えてもらいますからね……で、次の目的地ですが、まずは北にあるレーベの村を目指すつもりです」

そこで情報を集めてアリアハン大陸から出る方法を探しましょう」
流石に願いでも水泳スキルなんて無かったしなあ

ダナリン様の宝玉も持ってこれてないし、地形の書き換えも出来ないかあ

壁生成やドア生成でもどれだけかかるかわからないし、素直に正攻法で行ったほうが良さそうだな

「それじゃ、まずはそのレーベの村に移動か」

北にあると言っていたから、その通りに歩き始める……………あれ？

歩き始めて数分、途中橋を渡って森を越えて、気が付けば一人になっていた

せつかくレーベの村と思わしき場所も見えてきたのに

通った道に戻ると、橋の辺りに歩いている少年が居た

「歩くのが遅すぎるよ少年」

「ライアさんが速すぎるんですよ！」

普通レーベの村まで一日は掛かるんですよ!？」

……………そう言えば強度の高いセブリングのエンチャントに、ただでさえ高い速度、母を訪ねての称号効果もあるからな

いつも街間の移動は数分だったから忘れていた

「それじゃ、少年に合わせる……………いや少年の後ろを歩くようにするよ、それなら問題ないだろう」

「わかりました、ちゃんといってきてくださいいね」

という事で、少年の後ろを歩くように気をつける

、少しでも気を抜いたら追いつきそうだな

途中遠い距離におおがらすが居たため、この世界での魔法の威力を確かめるために魔法の矢を撃ったが、一瞬で爆散して余波でその周囲の木が吹き飛んだのは内緒だ

レーベ到着

あれから少年の速度に合わせゆつくりと移動を続けた結果、日がすっかり沈んだ頃にレーベの村とやらに到着した

参ったな、聖枷……速度を極端に落とすように育成した聖なる武器を持っていればもう少し楽だったのだろうが、生憎アレは普段から使うわけでもないために自宅に置いたままだった

私の四次元ポケットにも入っていない

「はあ、はあ、ライアさんに合わせると体力が……今日は一旦宿に泊まって、明日情報収集をしましょう」

「これ以上速度を落とすのは私も中々辛いのだが……まあ努力はするでしょう

で、情報収集は明日だな、わかった」

と、少年の提案で宿に泊まることになった

宿はすぐに見つかり、部屋をとる事にしたのだが……

「すまないね、ウチの宿は普段から使う人も少ないものだから、部屋は一つしか無いんだ
ベッドは二つあるから、そちらが良ければ少し安くしても良いが……」

「ひ、一部屋ですか!？」

さて、少年は何を焦っているのだろうか

「ぼ、僕達は男女で、そういう関係でも無いので一つの部屋と言うのは……………」

「少年がそこまで焦る理由が分からないが、部屋が一つしか無いというのなら仕方ないだろう

どうしても言うのなら私は外で寝るが？」

「う……………女性を一人で外に寝かせるわけにも……………わかりました、その部屋をお願いします」

「はいよ、一人2Gだが、二人で3Gにまけておくよ」

「ありがとうございます」

ようやく部屋がとれ、宿の主人の案内で部屋に入る

そして主人が自室に戻ったところで、窃盗スキルでベッドを一つ盗み、四次元ポケットに収納した

「な、何やってるんですか?？」

「気にするな、明日になったら戻しておくさ」

と、同時に世界最高のシルク細工の幸せのベッドを取り出し、ベッドが置いてあったところに設置

更に世界最高の《癒しのジュア》の皮製の《癒しのジュア》の抱き枕も設置する
「ど、どこからそんなものを……………」

「睡眠は大事だからな、私は常に最上級の睡眠用具を持ち歩いている」

ベッドに倒れこみ、抱き枕を抱きしめながら答える

「ああそうそう、私の身体に欲情したと言うなら襲つてきても構わないぞ？」

自分が相当に魅力的なのは理解しているからな

もつとも、代金…21億4748万3758Gを払えないと言うなら、少年は死体に成り果てるだろうが」

「お、襲いませんよ！　というかなんですかその値段は!?!」

「はっはっは、それじゃあお休み」

、適当にからかってから就寝する

明日は情報収集か、まあそれなりに頑張ってみるとしよう

(お、おやすみのキスなんて…絶対にやだからね！)

翌朝、私は一通り情報収集を済ませてから未だ眠りこけている少年を尻目に肉を焼いていた

いつもならジュア様に捧げるのに使っている、巨大なブルーバブルの肉だ
焼きあがったそれを食べていると、少年が起きだした

「いい匂い……おはようございます」

「おはよう少年、とりあえず朝食だ、好きに食べるといい」

「ありがとうございます……」

と、寝ぼけながらも食べ始める少年

まあ、バブル、ブルーバブル、塊の怪物の肉は全て億単位で四次元ポケットに収納してあるため、普通のヒトが一生食べ続けたところで無くなる事も無いからこの先食糧難になることは無いだろう

「さて、情報収集をしてきた結果だが」

「あ、はい……もう行ってきたんですか!？」

「朝早くに目を覚ましていたのでな」

でだ、このアリアハン大陸から出るにはこのレーベの村の南西に位置する祠に行く必要があるらしい」

「な、なるほど、それじゃあ次の目的地はその祠ですね」

「そういう事だ、それを食べ終えたら早速旅立つとしよう」

さて、祠から旅立つとはどういう事か分からないが、そこは行つてのお楽しみ……だ

いぎないの洞窟を抜けて

レーベの村を発ち、しばらく魔物を少年に狩らせながら進んでいくと祠が見えてきた……けど、ここには何も力を感じない

力を感じるのもう少し北からだな

「あれ、ここに入るんじゃないんですか？」

「多分だけこの祠はハズレだね 北に何かがありそうだから、そっちに行ってみよう」
「はあ、ライアさんがそう言うなら……ライアさんがすごいのは分かりましたし、こうして何かを感じるのもそう言ったところから来てるんでしようし、信じます」

「それは良かった、じゃあ行こうか」

というわけで更に北へと進むと、そこには一つの洞窟があった

「ここ……かな、うん この先にムーンゲートのような気配がある」

「むーん……？」

「ああいや、私の地元にある、世界を繋ぐ門の事だ、多分そのものはここには無いから、気にする必要は無いよ」

「そ、そうですか……とりあえず、先に進んでみましょう」

洞窟を少し潜ると……すぐに行き止まりだ

「ううん、ここであつてるんですかね？」

「ああ、多分合つてははずだよ」

と、私は壁の前に立つて壁を殴る

「な、いきなり何を……つて、道が出来た!？」

「採掘スキル、極めればほとんど全ての壁を掘り抜けるスキルだよ

もちろん私も極めている　じゃ、この先に行こうか」

少年を連れて洞窟を進んでいく

道中出てきたのは虫やウサギ、アリのクイ、洗礼者のような人型の魔物

私がデバフ魔法で援護をしながら、直接的な戦闘は全て少年に押し付けつつ、洞窟を更に進んでいくと、道が三つに分かれているところに出た

まあ、魔法の地図の魔法を定期的に使っている私には関係が無い話だけれど

途中の扉をロックピックで開錠して部屋に入ると、そこには青い渦のようなものがあつた

「旅の扉、ですね」

「なるほど、これに長距離を繋ぐ力があるって事か」

私はすぐに旅の扉とやらに入っていった

「ちよつといきん」

視界が一瞬途切れたと思うと、先程まで居た洞窟の中とは風景が一変していたなるほど、ムーンゲートを通った時に似ているな

「ライアさん、いきなり入っていくなんて、危ないことがあったらどうするんですか！」
「その時は君もすぐに旅の扉を潜れば良いだけだろうに」

「いや、そうじゃなくて扉の先で……いえ、もういいです

ここから出てみましょう、多分近くに国か街があると思います

旅の扉は国で管理されている事も多いので」

「うん、それじゃあ行こうか」

少年の提案に従って祠を出ると、北の方に人工物が見えた

あの大きさだと、多分城壁辺りかな

「それじゃあ進路を北に、進んでいこうか」

「はい、行きましょう」

………とところで、道中魔物が出てきたら………」

「もちろん君が相手するんだよ、修行修行」

「わかりました………」